

POETS'
SCHOOL

13

詩 人 学 校

第 13 集

近江詩人会テキスト



作品目次

海の見える窓……………	藤井 一郎… 3	採集標本……………	藤本 英策… 12
デッサン……………	高橋 輝雄… 4	残暑の中のイリエーション……………	田井 中 弘… 13
死……………	杉本 長夫… 5	童戯の渚……………	小林 英俊… 14
半開きの終末……………	眞野 喜惣治… 6	躍動の歌……………	猪野 健治… 14
病床迷語……………	井上 源一郎… 6	詩の創生……………	宇田 順美… 15
午前七時……………	藤 沢 耿二… 7	泥まみれの路は……………	岩 崎 寿雄… 16
わかれ……………	河村 純一… 8	町の山岳は重疊としてゐます……………	廣 田 一彦… 16
庭……………	岩 崎 昭弥… 9	紅 い 月……………	中川 いづじ… 17
湖……………	田 中 克己… 10	或る日の病床日記……………	阿 田 夢三… 18
峠……………	陵 木 静… 10	地球と太陽……………	蒲 良典… 18
近代のまひるの神話の……………	中川 郁雄… 11	貨物自動車……………	武 田 豊… 20
		麥 酒……………	ふちのかずを… 20
		湖……………	錦 織 白 羊… 21

海の見える窓

藤井 一郎

今日こゝに着きました。
一度来たことがあるやうに思つて
乗つていた汽車から降りてしまひました。
こゝはさがれた海沿ひの町。
でも、やつぱり知らない町でした。
いつもこんなふうにして
行く先のあてが無くなつてしまふのです。
それから海辺の旅館にとまりました。
すると不思議に
その女将さんを知つてゐるやうに思ふので
す、

たとへば
小さいとき仲良しだった小母さんのやうに。
通された部屋は
窓から海の見える部屋でした。
ひっそりと海岸の砂のやうに白い部屋でした。

なんだかあの女将さんにも
自分の事を全部喋つてしまひたい氣がしまし
た。
でも私は旅人なのです。
遠く海鳴りがしていましたが、
色々な町や、そこで親しかった人達など
海から来る風のざわめきのやうに
思ひ出されて来ました。
しかし、そこでもやはり私は旅人でした。
あたりは何時か夕暮れて
港には船が
小さなランタンを燈けました。

——朗読のために——

デッサン

高橋輝雄

花？花だな お父さん 花があるいてる どのへ行くんだらう？ こんな夜更けに ばらいるにかがやいて花たちがあるいてる どのへ行くんだらう？ 窓の向うの 作曲家Fさんのお家のもつと向うの あの道を ぼくは知っている 作曲家Fさんが生きていたときにはは作曲家Fさんは朝も晝も夕方も夜更けにもこつこつあるいていた道だ ぼくもこつこつあるいてみた お父さんもこつこつあるいていたな パンをかじりながら パンには花の匂いがしみて お父さんが貧乏をわすれたような顔をしていた そばで作曲家Fさんがうれしそうに花をながめていたな あの道を花たちががあるいてる こんな夜更けに花はどのへ行くんだらう 花たち ひっこしするんどちがうかな ひっこししたらつまらないぞ ああひとつひとつの花がばらいるにかがやいてる こんな夜更けに 花があるい

みんな
ばんざい

私の体には通風筒みたいな穴があいていて風が世間話をやりながら無遠慮に吹き抜けるいちぢくの葉っぱにのっかってかえるが二匹けんかしてたんだよふん
おまえがガアガアなくからうるさくてひるねがてさないぞかえるAがどなるとかえるBもどなるんだああこの社会からかえるがいなくなったらどんなにたすかることかと言うわけさ
私は私の通風筒を覗いて向うの世界を眺めたがかえるがガアガアなくばかりであった

ている 花たちはどのへ行くんだらう あだめだ お父さん ぼくのうちの花もみんな行ってしまう ぼくも行こう あの道を歩いて行こう 花たちといっしょに ばらいるにかがやいて ぼくも行ってしまうぞ

私のそばを汽車が通りすぎた
汽車にはかぶとむしときりぎりすがのっていたかぶとむしときりぎりすばんざい
私のむすこのノオトには幸福なプランがぎつしりつまっていた幸福なプランよ幸福なプランが私のそばを通りすぎた私のむすこをのせてむすこよかぶとむしときりぎりすよ幸福な汽車よ

死 顔

杉本長夫

青ひといろの空のなかで眞夏の太陽は歩み疲れ私は重い悲しい心をいだいて御濠の端に佇すんだふと見ると黒くよごんだ足下の水に見なれぬ影が浮いている蓬髪の骨ばった顔がまるで変色した写真のように写っているその下には何か黒い小さな生命がちらちらといやうしく動いている青みどろがかすかに揺れて不気味な陰影をつくっている
現在と未来の不思議な邂逅あゝ 死んでいる 死んでいる私だけのみた私の死顔黒い泥の底からふと浮び上った淋しい悲しい私の死顔

半開きの終末

眞野喜惣治

あなたに
若し死があるとしたら

あなたが棺におさまるとき
葬儀屋のピンセットが
おどなしい恰好をした半開きの眼をつまむて
深く目をつむらせ
体裁のよいやわらかな半開きの口をこぢあけて
ぎゅっきゅと綿栓をつめ込むだらう

冷いおなかへは
ぶすぶすと注射針で
アルコールをうんと飲ませるだらう

そしたら あなたは
色の交ったはらの底から逆流してくるものを
綿栓をくわえて開いた口から
どんな風に吐出すことか。

二内

心臓よ

その疼痛に堪えられるか

しかしおれは身動も出来ないのだ

けふも天井を視つめて考へている
おっぱり出された手足のことを
手術された後のおれの姿のさびしさを
いくら哭いたとてどうにもならないのだが

昭和二十六年八月九日

夢

ピンクの薔薇が一輪咲いていた
生々とした可憐な花だった
みるみる大きくなつて
その蕊に一つの面輪がかびでた

涙を一ぱいたゝえた眸でみつめていた

病床迷語

井上源一郎

こゝはどうやら異邦のベツトらしい

一体おれはどうなるのだと
熱ばつたい目で
けふも天井を視つめて考へている

あの時の瘡傷も
どうやら一命はとり止めたが
いまだに微動だもできない焦しさよ

ドクターの白い外衣の出入するたびに
不吉な予感で
あゝ……胸くるしい

いよいよ手術する寸法らしいぞ
手の
足の
血脈が切断される時

何か胸がキユウと締まるような香氣に咽むて
眼ざのたわたしは
月皎々とした孤床にいまもなほ
その香が漂うている心地がする
夢のなかの
その懐しい匂が

二六・二六

午前七時

藤沢 耿二

白い歯刷子を使っている少女が見える

松の瘤にひつかゝつた雲と海

おれの背中で風船笛が鳴っている。

わかれ

河村純一

たらたらと血が流れ
骨のくだける音めきめき

残忍は古代の女と

思ふのだが

私はあなたを崇拜するのを
ためらひ出した

あなたの中に

古代の女の血を

追求するのが

こわくなつて来た

だがしかし

きざしを汗にくだつて

滑らかな足を

水にひたしてゐる

あなたを見下せば

たにかひを好む

アマゾンの

はげしい美しさか

私の血をかき立ててやまぬ

ああ背徳と裏切をもて

あなたに報いようとした私も

今は敗北の思ひを抱いて

わかれをつけよう

廿世紀は怯懦を

辨護してくれはするが

今あなたに値するのは

やはり血と肉であることを

知つて見れば

曾て冒険を嗜ける

勇氣のないままに

自らを俗物と諦めた私は

ひとり別れを告げて

歩き出さねばなるまい。

三六

「ああ別れ来つて

もはや遠い道のりであるが

めつむれは私の眼底に

今も尚 ~~変々~~ たるのは

男の血と肉を

いけにえに求める

あなたのはげしい

原始のうつくしさである。」

庭

——彼女のうた——

岩崎昭弥

向ふでは

はや新しい恋をしてゐる先生——

詩人だからか怨めなく

二度も訪ねていつたのに

二度とも会へなかつたわたし

奥さんだけを、みて帰つた

去年の今頃——

また戦争が起つたら

深い林へひそまうと

抱いて口説かれた先生だつたのに

いま私は

ひとり此の庭に立つてゐる

お前の口、唇、それに語りまで
忘れないとおつしやつたけど——

わたしを捨てた先生は

此の春、奥さんをつれ

難波の街へ帰られた

難波の街の逢瀬にあへず

塩つ垂れて帰へつた心は

きまつて此の庭にわたしを立たせたが——

けふ此の庭は

秋風が立ち 去年の虫が鳴いてゐる

湖水

田中克己

峠で

陵木 静

あの夏おまへと行つた湖は
ことしも青く澄んでゐるのだらうか
おまへのゆめは見えないか
湖のいろはよくゆめに出て来る
おまへとはもう逢ふこともない
どうしてそれに耐へられるのだ？
自分にもわからない
たゞ湖のいろは僕のゆめによく出て来る。

記憶にさへも
遠い
愛情のこんもり茂つた森などが
懐しい
巨離に見えるので
わたしは
重荷をおろし
青空に深く潜んでいる
少年の目をさがした

近代の まひるの 神話の

中川 郁雄

碧空のふかき 神々の囁もきこえな
い 下界にたれさがる まつしる
の光と乾いた風 犇めくビルは背の
びをし geometrical な屋根に
神の栄光をうけとめる 智慧をハン
カチのように 胸にしまひこんだ
猿どもが 谷間を匍いまわり ビ
ルの高さに見ほれ 周章てふためき
乾いた風を呼吸する 碧空のふかき

父親の場

ふみ代が
蟬のように泣いている
二オの
不思議ないのち

寂しいのだらうか
寝苦しいのだらうか
ぼくは
おろおろ
田扇で煽つてやる
砂ほこりの街を
えんえん
ほつゝき歩く
飲んべえでぐうたらな
ぼくが
手が痺れるほど
破れ田扇を煽ぎつゞけ
まよなか
暮しの重さを
掌ではかっている

採集標本

藤本英策

ツノムシ

お前、体は屈強だが
其のツノがなかったら……
どうする。

森は生存競争のはげしいところ。

蟬

高い所で嘲笑ったな

苦惱は聞きとどけてやらう。

二年の地下生活に比べて

十日の死闘は

あまりにも酷すぎる

蝻 蝻

この暑いのに……
曲るより弱い誇りは
秋に廻せばよかった。

蜻蛉

四枚と云つても

薄翅では

デュラルミンの二枚には敵わない。

蝶

死んでからでも

かように鱗粉が氣になるか。

——え、なりますとも

か弱い身の上

翅が虚栄の全てです——

蛾

歉くな！ お前だつて鱗翅類ぢやないか。

蜜蜂（雄）

死を恨んではいけない

役目は果たしたのだから。

せめてもの慰み

標本には女王と並べてやらう。

残暑の中のイリユージョン

田井中 弘

1

乙女の瞳のように 薄明の涼風をはらいな
から まばゆくはじく光線の傍に 眠りこけ
た小猫が せわしく顔を洗っている

光は尾を曳いて午前の丘に 散漫な首を抬
げ 翼は影の中に懶惰な眸を落している

光と影と のんびんだらり 融け合いなが
ら 眞晝 なぜこうもほおけたリリズムが

漂うのだらう

2

瞬間 断崖に雷が光った

青春の日はかない宴のように その松影

でべーぜしたあの時この時 村の水田が転倒

し ちろりちろりと秋の虫が ひそかにリリ

ックに鳴いたつけ

空から土へ 僕のイリユージョンは僕の影

に眠り 淡いイリユージョンを押えている

オーイ

3

山から山へ渡つてゆく 追憶の葉風が は

たと比良山脈に移る時 湖面は空に反つて

山なみを震わせ 濃い緑と破れた断崖のち

色の上を 高いのようには とぼとぼとただと

ぼとぼと僕は歩く

病み疲れた光と影をものうく 病んだ背に

力なく背負いながら

一九五二・八・三

童戯の渚

小林英俊

雨垂れは音をたててゐるのに
空はケロリとして蒼い
鷗が紙片のように舞ふてゐる

藤椅子を二階の窓際へ倚せて
再び花のように咲いた海面を微笑みながら
自分の胸を蝕んでゐる怖い病さへ忘れてゐた

ぽつぽつと岬に星影が見える頃になつても
渚辺だけは杳い思出のように反明るく昏れ残
つてゐた

月夜の賦

世紀をつらぬき億劫を重ねた月よ
湖面が立ちあがりざま身に迫ってくる
ふるさとの映像に私は劇しい業苦を憶んだ

むぎわら帽のその人

「うーんとこ」

「うーんとこ」

六人が二列に並んで

同じ速度でハンマアをうち下ろす

「ぐわーん」

「ぐわーん」

何と美しい音だ！

人生そのもののリズムだ！

シグナルが青にかわる

「ぐわーん」

「ぐわーん」

正確にうちおろされるハンマア

赤鉄の様な太い腕が雨にぬれて

ギラギラと光っている

飄々と雲が去来するニヒルの翳に
あらゆるものを失い 踏みにぢつて
ナポレオンよ 君がさらばを告げた

蕭條と疲憊の胸底に滲み入る月光――
すかれた数多の理念を拾ひあげながら
蹣跚と虚妄の間に身は溺れてゆく

躍動の歌

猪野健治

猛烈な雨のなか

雨の凄音のなかにするどくひびく
ハンマアの音

「ぐわーん」

鋼鉄のさえたその音

銀色に光ったレールの上に

人間がいる

レールエ夫だ

黒いレインコートををはなつた

詩の創生

宇田頌美

余す所 数時間

思考は ピカソ

脳髓は足なへのクラゲ

用紙はいたづら書でうづまり

同人の幻影は

早よう／＼ とせき立てる

睡眠はとろりと

順不同の文字を併列し

表題は朱筆の血で染められる

夏は無情に夜を早やめ

肌えは夜明けの風を呼ぶ

×切 数時間前

早産の詩は

こゝに

おど／＼として

天を仰ぐ

(八月四日 早朝)

泥まみれの路は……

岩崎壽雄

泥まみれの路は
規則正しい風景の中に果しなく伸びてた

人

自転車の波に

人の群

折檻の紳士もおれば

化粧学の女性も走る

学問を

サンドウィッチにした青年もあれば

生活をポケットに藏ってる老人も駈足だ

ワイッショ　ワイッショと

法律そのけの前進振り

私は

多くの人と反対に

泥水載いてベルを鳴し続けた

町の山岳は重疊としてゐます

廣田一彦

町の山岳は重疊としてゐます

——夜になると

コンクリートの氷河も

アスファルトの雪溪も

白く乾いた屋根瓦迄

万年雪の様に汗え澄みます

夜っぴいて

遠く潮騒に通ふ瀬音や瀑布の響さへ

耳朶に傳へて呉れるし

白堊のビルのカルデラ湖では

畔りの喬木に時々狹霧が流れ消えてゆきます

山嶺の中には

忘れられた地獄の様に

人々が眠つてゐます

紅い月

中川いつじ

夕靄けむる屋根と樹木とが織りなす

私の部落に触れんばかり

紅い月が

泥色に染んだ中空に押出されてゐた

暫らくの日の旅の疲れが

無気味なほど静かな村の景は

無心に私の足を停めてしまった

動かない紅い月

動かない私の村

動かない私

混雑した現実社会も

この一瞬虚無となつて

幽邃な孤独を現じた

花　火

爆音と共に友が来て

湖祭の花火を種に連れ出した

湖畔はすでに人が渦巻き人いされの

臭風は熱した群衆の頭を渡つてゐる

そここの酒宴や騒擾は

大人とおもわれぬ無邪気さ

行く砂道は埃のために明るいつ灯や

商店の品物がぼんやり

阿呆のように並んでゐる

私は反を振つて小高い丘にのぼり

咲いては散る湖の上空の

花火の中に

もう一人の私を発見しようと思つてゐた。

紅い月がいつか紅提燈に見え次から次え
杳い日歌つた記憶が昇天していった。

或る日の病床日記

阿 田 夢 三

鼓動の片鱗に自己を失ないはじめた日は
病室にはビタミンCがない

蝕ばれてゆく痛みを秘かに辿つてゐる
私の感覚が、何時か白い壁に動いてゐた

——生きてゐる事を知つて既に幾時間

血液の逆運行が続く——私と私とが
戦つてゐる宿命

可愛い、女の子のポートレートの影響を
現実はずく逃れようとしてゐる悲哀——

体温と脈膊の闘争が水薬で続けられて
ゐる私の生命。

三四

地球と太陽

蒲 良 典

赤い化膿、

発熱三十八度の胃痙攣

嘔吐

喀血、やがて……？

痘痕面の醜い巨大な土塊は

靡爛した傷口と

内臓する病患の

激痛に耐えかねて、

今や宙空を のたち転げ廻る。

あ、永遠に病める土塊よ、

だからお前には

太陽光線療法が

絶体必要なんだ！

二六七、三一二三時

愛の中にある心

夕の窓に

杳い母の感傷が私の胎内に映るとき
私は風の中の子供になつてしまいたい

ひよこが殻を啄む小さい余韻に
私の愛情は崩れようとする

吾子の魂の中から亡き母を

呼んでみたい

小さい夢をまどめようとする顔に

杳い母の愛標が私を揺する

私はアンデルセンのお城の中で
思ふ存分泣いてみたい

私の胸をそつと叩いて行つた女
想ひ出は私の生命を刻んでくる
“母ちゃん”と呼んでみたい心を
杳い日の女の白誌に綴りたい

山の麓の芒原

(抒情小曲)

山の麓の 芒原

螢チラチラ曰が暮れる。

暮れる麓の 芒原

歩ゆむチラチラ影二つ。

明日は別れて ゆく二人

葉影チラチラ虫が啼く。

じつと黙つて 佇づめば

街のチラチラ灯が遠い。

頬に頬寄せ さようならと

言へばチラチラ瞳がうるむ。

泣いて別れた 影二つ

空にやチラチラ星一つ。

山の麓の芒原

螢チラチラ曰が暮れる。

二六八、三一二二時

貨物自動車

武田

豊

運送屋さんの前に
大きい貨物自動車が
荷物を一ぱい積んで
えらそうに煙をはいて休んでいる

うしろの箱を見ると
名古屋、岐阜、滋賀、四日市、京都
大阪、神戸、姫路、
その行く先き先きが書いてある

これから南へ指して行くと
京都や大阪に私の友達がいる
時にこの自動車を
鬼かけた人があるう
これから見かけることがあるう
ふつとなつかしく思い
汚れたどれ除けにさわつていた

麥

酒

ふぢのかずを

琥珀の夜に
粉雪がふつている

幼いころの
絵本に
そんな童話があつたような

何時かの
ノクターンに
そんな想いがしたような

遠い
北の涯に
そんな世界があるような

喉の渇きに
一息に飲みほした
デヨッキの中の逆さの天地

白

萩

——亡き友の庭に佇ちて——

琥珀の夜に
粉雪がふつていた

湖

錦織 白羊

八月の空をうつしている湖

白いヨットが
窓を掠めた

湖は
青く揺れていた
湖水は
湖水のいのちだけを

夕闇の中に
風にさゆれてか
こぼる、ように咲いている白萩よ

お前の近くの病床に
廿餘年も胸を病んでいた友は
地上を去つたよ

友は
瞬間をきよく
瞬間をしんけんに生き続けた
白萩よ
蟲が啼いているよ

會員住所録 順不同

伊吹達夫 滋賀縣東浅井郡七尾村野村
 中川五明 〃 〃 大郷村川道 555
 浅野田木居 〃 〃 大手町ラリルレ口書店気付
 武陵藤押谷欣之助 〃 〃 大手町 32
 藤押谷欣之助 〃 〃 錦町 33 長浜公共職業安定所内
 小足林英一 〃 〃 錦南町
 小杉本野村月田川 〃 〃 南吳服町長浜保健所内
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 高田北町 15
 小足林英一 〃 〃 南小足町 125
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 彦根市正法寺
 小足林英一 〃 〃 川原町
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 中綴町 720 官舎 17 号
 小足林英一 〃 〃 四番町
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 一番町
 小足林英一 〃 〃 四番町
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 本町 (宇田順美)
 小足林英一 〃 〃 安清町甲
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 本町天辰室内
 小足林英一 〃 〃 安清町乙
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 滋賀縣犬上郡河瀬村出町
 小足林英一 〃 〃 蒲生郡老蘇村西老蘇
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 苗村川守
 小足林英一 〃 〃 八幡町池田町二丁目
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 出町五丁目
 小足林英一 〃 〃 蒲生郡安土村常楽寺
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 神崎郡能登川町本町一丁目
 小足林英一 〃 〃 永源寺村山上上瀬平太郎方
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 守山町吉身
 小足林英一 〃 〃 吉身
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 草津町元町三丁目
 小足林英一 〃 〃 甲賀郡岩根村菩提寺
 大杉藤河望宇中蒲猪野喜三郎 〃 〃 柏木村北脇千代直一方
 大津市石山島居川松原 55 岡本方
 〃 〃 高見町 16 初田榮之助
 〃 〃 (関の津局区内) 大石曾東
 滋賀縣滋賀郡伊香立村伊香立中学校内
 〃 〃 高島郡 (安曇局区内) 広瀬村阿田夢三
 京都市左京区下鴨東半木町 74 脇村喜志方
 大阪府布施市西堤町 607 の 1
 神奈川縣藤澤市鶴沼 2255 仁位方

昭和二十六年八月十九日発行

五〇部限定 (価四〇円)

編集者 井上多喜三郎

滋賀縣蒲生郡老蘇村西老蘇

印刷所 文童社

京都東山区内南海屋町三六

発行所 近江詩人会

滋賀縣武生市西老蘇

井上多喜三郎方